

[ 論文 ]

# トランスナショナルな社会空間をめぐる多元的生活実践

—— 中朝国境における人びとの移動と生活世界 ——

朴 欽

はじめに

ロシア極東地域及び朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)と国境を接する中国東北部の延辺朝鮮族自治州(Yanbian Korean Autonomous Prefecture)には、古くからコリアンが集居していた。特に豆満江(トゥマンガン、Tumen River)沿岸一帯は、「朝鮮北部の朝鮮人が夏はシベリアで働き、冬は食糧が豊富で住みやすい延辺で過ごし、このようなことを数年間繰り返して、少しまとまった金がたまると朝鮮に帰ってくるというふうに、国境を自由に往来していた」という記録がある<sup>(1)</sup>。このように、豆満江沿岸一帯には、自然村を基盤に歴史的連続性によって構築された親戚・同郷関係が国境を跨いで形成されてきた。

本研究は、1950年代から1990年代を中心に、コリアン・チャイニーズ(以下朝鮮族)が移動を通して自己実現していく過程を個人、場所、地域、国家といった重層的な空間から考察する。本研究では、次の3つの時期から彼らの国境を越えた移動の経験を説明し、その生活世界を理解することに取り組む。①朝鮮戦争休戦後から「チョソンパラム」(北朝鮮ブーム)の展開前まで、②「チョソンパラム」の展開(1957年後半～1964年)、③中国の改革開放とともに生じた「親族関係」を活用した多元的生活実践「ポツリチャンサ」。

本稿がめざしているのは、国家が社会や文化に関与することを否定することではない。むしろ、国家が社会や文化の生成や再編とどのように関わっているのかを認識・確認しつつ、国境をまたぐ人びとの視点からその問いを探ることである。具体的には、中朝国境におけるトランスナショナルな実践を担う人びとと国家とのかかわり、そのうえ国境をまたぐことの意味を、彼らのライフストーリーの分析に基づいて考察する。

## 1. 序論

### 1.1 トランスナショナルな実践と「跨境民族」

トランスナショナルな現象への関心は少なくとも20世紀初頭にまでたどることができ、

(1) 鶴嶋雪嶺『中国朝鮮族の研究』関西大学出版部、1997年、3頁。

当初のトランスナショナリズム概念は、1960～1980年代の多国籍企業や国際的なNGOの活動の量的・質的増大という実体を伴った概念として成立した<sup>(2)</sup>。

トランスナショナルやトランスナショナリズムの訳語・同義語として使われる「越境」<sup>(3)</sup>という言葉がある<sup>(4)</sup>。「境界によって区切られるカテゴリーを横断すること」<sup>(5)</sup>を意味する「越境」は、人・カネ・モノ・情報が境界を越えるという事実のみを意味し、境界を越える行為それ自体に、それ以上の意味合いを持たない「クロス・ボーダーな行為」となる。それに対して、トランスナショナリズムは境界を越える「クロス・ボーダーな行為」という事実よりも、「結果として生じる多元的・多層的帰属状態ないし帰属現象」<sup>(6)</sup>を強調するのである。すなわち、トランスナショナリズムは国境を越える行為であること以上の意味合いを持つ。

均質な内部、境界のある物体として特徴的な外部という性質を国家、社会、文化に与える世界を実体の硬くて丸いビリヤードボールのように互いに回転しているグローバルなビリヤード場としてモデル化したウォルフは、「名前の付いた実体を、安定した内部構造と外部境界によって互いに対峙する固定された実体として扱う習慣は、それらの相互の遭遇と対立を理解する能力を妨げる」<sup>(7)</sup>と述べている。そのように、「長らく人文社会科学を支配し続けてきた一民族一国家を原則とするような国家観ないし民族観」<sup>(8)</sup>はトランスナショ

(2) 上杉富之「人類学から見たトランスナショナリズム研究：研究の成立と展開及び転換」『日本常民文化紀要』第24号、2004年、126-84頁。Alejandro Portes, Luis Eduardo Guarnizo and Patricia Landolt, "The study of transnationalism: pitfalls and promise of an emergent research field," *Ethnic and racial studies* 22, no. 2 (1999), pp. 217-237.

(3) 松本誠一は、「跨境」という語をあえて使う理由について、A国からB国へ移住した移民(合法・非合法を問わず)だけでなく、複数の国を往来しながら移民とは言い難い生活を実践している人々をも含めて想定しているからだとして述べている。また、松本は「越境」という語を使用することに躊躇する理由として、この言葉に違法行為を連想させる語感があることを指摘している。密航や密貿易といった不法行為でなくても、道徳的・思想的に問題視される行為を実行するニュアンスが連想されると述べている(松本誠一「跨境コミュニティにおけるアイデンティティの持続と再編：東アジアと東南アジアの事例から」『白山人類学』第15号、2012年、1頁)。関釜・釜関フェリーで日韓間を行き来しながら生活するコリアンの生活実践について考察を行った井出は、「跨境」と「越境」の区別について指摘している。井出は、「跨境」という言葉は①早くから中国において境界を往来して交易する人々や民族を指す言葉として使用されてきたこと、②トランスナショナル(transnational)という外来語の訳語としての跨境という指摘もあることを述べている。そのうえ、「越境」と「跨境」の区別は曖昧であるが、「跨境」は「越境」を内包するものとして広くイメージすること、さらに「行ったり来たりする」というニュアンスがあることを重要な点として取り上げている(井出毅毅「関釜・釜関フェリーで日韓間を跨境する人々の生活実態：ポツリチャンスと、ある在日コリアン男性の事例から」『韓国朝鮮の文化と社会』14号、2015年、85-106頁)。

(4) 上杉「人類学から見たトランスナショナリズム研究」2頁。

(5) 篠原徹「総論 越境する民俗の現代の意味」篠原徹編『越境』朝倉書店、2012年、4頁。

(6) 上杉富之「トランスナショナリズム」日本文化人類学会編『文化人類学辞典』丸善、2009年、111頁。

(7) Eric R. Wolf, *Europe and the People without History* (Berkeley: University of California Press, 1982), p. 7.

(8) 上杉「トランスナショナリズム」111頁。

ナリズムの「発見」<sup>(9)</sup>から再考を余儀なくされるものとなった。それはまた、上杉が述べているように「一対多、多対多の多元的ないし多層的な対応(つながり)の可能性をも射程に入れた『柔らかい』思考への変更をも迫るもの」でもある<sup>(10)</sup>。

本稿の主題である近現代の中朝国境における国境を越える実践は、「結果として生じる多元的・多層的帰属状態ないし帰属現象」<sup>(11)</sup>を示唆するものであり、そのような点から、その実践をトランスナショナリズムの視点から考察する有効性が示される。

1990年代以降のグローバル化の進展に伴い、それまでの単方向的な移動とは異なった多方向的な移動という現象が現れ、人の国境を越える大規模で頻繁な移動が顕著に見られるようになる。その中で新たな現象として注目を浴びている概念がトランスナショナリズムである。バートベックは、グローバリゼーションが進行する以前の初期の移住者に関して、初期のつながりは「真に『トランスナショナル』」ではなく、「移住者が当時対処しうる最善の方法として、散発的な形で維持される越境的移住者ネットワークに過ぎなかった」<sup>(12)</sup>と述べている。

しかし、冷戦後のグローバル化は、現在までもあくまで既存の国民国家システムを前提とした「国家が管理するトランスナショナリズム」として展開してきたことも指摘されてきた<sup>(13)</sup>。また、「移民がどの程度越境活動に関与していれば」<sup>(14)</sup>トランスナショナルな行動に従事する移民として定義されるかということは十分に実証されていなく、「トランスナショナリズムにとって重要なことは、その定義からして真にトランスナショナルな活動が個人の生活の中心になっていること」<sup>(15)</sup>を考慮する必要がある。

以上をふまえて、本稿では、「トランスナショナルな活動が個人の生活の中心になっていること」<sup>(16)</sup>を考慮しながらも、さらに、国境を越える行為であることよりも「結果として生じる多元的・多層的帰属状態ないし帰属現象」<sup>(17)</sup>を強調するものとしてトランスナショナリズムを捉え、議論を進めたい。

朝鮮族(Korean-Chinese, Chaoxianzu、以下朝鮮族)は中国の少数民族として位置付けられているが、歴史的に見ると彼らは17世紀初頭から長い歳月を渡り、朝鮮半島から中国東北

(9) Linda Basch, Nina Glick Schiller and Cristina Szanton Blanc, *Nations unbound: Transnational projects, postcolonial predicaments and deterritorialized nation-states* (London and New York: Routledge, 1993), p. 5.

(10) 上杉「トランスナショナリズム」111頁。

(11) 上杉「トランスナショナリズム」111頁。

(12) スティーブン・バートベック著、水上徹男、細萱伸子、本田量久訳『トランスナショナリズム』日本評論社、2014年、22頁。

(13) 長津一史『国境を生きる：マレーシア・サバ州、海サマの動態的民族誌』木犀社、2019年。

(14) S. カースルズ、M.J. ミラー著、関根政美、関根薫監訳『国際移民の時代』名古屋大学出版会、2011年、41頁。

(15) 同上、42頁。

(16) 同上、42頁。

(17) 上杉「トランスナショナリズム」111頁。

地方へ移住してきた外来民族である<sup>(18)</sup>。彼らの移住は、近代東北アジアの情勢と深く関連している。

朝鮮族を対象とする実証的な研究が行われるようになったのは、1992年の中韓国交樹立を契機にその移動性が注目を集めるようになってからである。その先駆的な研究として、日本の研究者と中国の延辺大学民族研究所・延辺大学成人教育学院のスタッフとの共同研究『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』がある<sup>(19)</sup>。ここでは、1997年に延辺朝鮮族自治州龍井市太陽鎮における質問票を用いた100戸調査、朝鮮族家族に対する訪問調査および聞き取り調査という具体的なフィールド調査が実施され、人類学・社会学的なアプローチを用いた分析・検討がなされた。園田は、1997年に実施した龍井市太陽鎮における100戸質問票調査で得られたデータから、朝鮮族社会の移動社会としての特徴、性格を次のように指摘している。①個人ベースでの地域的・社会的な移動が頻繁に行われていること、②自らの「民族的アイデンティティ」を強く意識しながらも、移動の中でその要素をうまく現地状況に適応させていること<sup>(20)</sup>。

一方、朝鮮族社会の移動社会としての特徴を親族ネットワークの中で考察したパク・グアンソンは、現代の朝鮮族のグローバルネットワークは、「多民族国家で少数集団として生活しながら強固にしてきた血縁と地縁という伝統的關係に依存している」と述べ、ネットワークを通じて流れる絆は、朝鮮族のトランスナショナルな移動を可能とさせていると主張している<sup>(21)</sup>。このような指摘は、朝鮮族の移動性の分析において過去と現在との歴史的な連続性を注視する必要性、重要性を表す。

朝鮮族は「跨境民族(Transnational Ethnic Group)」とも呼ばれている<sup>(22)</sup>。長谷川は「跨境民族」の重層化した民族意識に光を当て、「跨境民族」とは、互いに同一の民族であるという意識を共有しあいながら複数の異なった国家内に居住する状態にある民族集団を指すと定

(18) 孫春日「東北アジアの視角からみた朝鮮族移民史：研究現況と今後の課題」権香淑・宮島美花編『中国朝鮮族の移動と東アジア：元日本留學生の軌跡を辿る』彩流社、2020年、12頁。

(19) 佐々木衛、方鎮珠編『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店、2001年。

(20) 園田茂人「第一部 第3章 移動社会としての太陽鎮 100戸調査の分析結果から」佐々木衛、方鎮珠編『中国朝鮮族の移住・家族・エスニシティ』東方書店、2001年、11-81頁。

(21) 박광성「초국적인 인구이동과 중국 조선족의 글로벌네트워크」『제외한인연구』21, 2010, pp. 357-374.

(22) 歴史的な文脈から見ると「中国社会においては、流動することがむしろ常態」であった。(山田賢「移民の定住化と『宗族』四川省雲陽県涂氏」塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編『流動する民族：中国南部の移住とエスニシティ』平凡社、2001年、39頁)。これまで中国社会における人の移動は、移住・移動現象の通時的検討、国家の政策が果たしている意義の解明や中国社会の特質を探索するなど、さまざまな議論の中で検討されてきた(塚田誠之、瀬川昌久、横山廣子編『流動する民族：中国南部の移住とエスニシティ』平凡社、2001年)。中国における人の移動は本稿で取り上げる中国東北部にとどまらず、南部地域(東南アジア諸国との国境地域)でも地域的・社会的移動が頻繁に行われてきた。また、「跨境」は朝鮮族のみではなく、中国における諸民族集団(例えばモンゴル族やカザフ族)にも当てはまる概念である。

義している<sup>(23)</sup>。したがって、跨境民族は、同一の民族としての民族意識のほかに、異なったナショナリズムや国民概念、国家観念の影響も受け、重層化した民族意識が醸成される<sup>(24)</sup>。朝鮮族は中国国内における政治・経済政策の変化に加え、1992年の中韓国交樹立を契機に、歴史的な朝鮮半島からの移住以来、「第2次大移動」とも言える<sup>(25)</sup>離合集散を繰り返し経験することで、その移動性が注目を集めるようになった。グローバル化の進展とともに、朝鮮族は、中国国内沿海地域への移動、韓国、日本、アメリカへ再移動を続けている。その中でも、韓国への大移動は「帰還移動・移住」、「回帰現象」として注目された。韓国へ移動・移住した朝鮮族を対象とした従来の研究は、主に収穫や移住労働者としての朝鮮族の移動、朝鮮族の移動とコミュニティ形成、ディアスポラと朝鮮族のアイデンティティ、トランスナショナルなネットワークなどに着目して論考されてきた<sup>(26)</sup>。このような従来の朝鮮族の移動性に関する研究は、1990年代以降の朝鮮族の移動、特に韓国への移動に焦点を当てて論じたものであり、朝鮮族に関する移動性の議論は「跨境民族」の概念と結び付けられて論じられることはなかった。

一方、1990年代以前の朝鮮族の国境を越えるトランスナショナルな実践は、短期的形態で行われた「単なる越境行為」<sup>(27)</sup>として記述されるなど、その研究成果は概説的な資料にとどまるものが多かった<sup>(28)</sup>。権香淑が指摘しているように、従来の朝鮮族の移動性に関する研究では、国家の間を媒介するアクターとしての朝鮮族と彼らの国境を越える活動・国際的役割を主題にその活動や異文化交流の活発化という事実が強調され<sup>(29)</sup>、「朝鮮族が国境を越えて行う生活実践や、複数の国家に帰属する多元的意識を新たな社会・文化的現象として対象化するには至っていない」<sup>(30)</sup>。そのうえ、「学際的なトランスナショナリズム概念

(23) 長谷川清「跨境民族」松原正毅編集『世界民族問題事典』平凡社、1995年、405-406頁。

(24) 同上、405-406頁。胡起望、「跨境民族探討」中南民族大学学报人文社会科学版4, 1994, pp. 49-53. 胡起望は「跨境民族」に加え、「跨界民族」の概念も紹介した。「跨界民族」とは、近隣諸国の国境を跨いで生活し、地理的に連続しており、居住地域が国境によって分断され、異なる国籍を持つ同一の民族を指す。一方、「跨境民族」は、国境を跨いで生活する同一の民族であり、地理的に連続していない場合もあり、その中には複数の国を移動することもある。胡は「跨界民族」を「跨境民族」の一部とし、後者を上位概念として位置付けた(胡起望「跨境民族初探」『金沢大学文学部論集 行動科学篇』12巻、1992年、109頁)。

(25) 李華『トランスナショナルな中国朝鮮族家族の人類学的研究：韓国への出稼ぎ移動を中心に』東北大学大学院環境科学研究科博士論文、2013年。

(26) Hyeong Kwon Jeon, "Myths of Motherland, Transnational Labor Migrants, and Exit: A diasporic perspectives on the Chinese Koreans," *Journal of Northeast Asian Studies* 38, 2006, pp. 135-160; Jean Young Lee and Woo Park, "A Study on the Formation of Korean-Chinese Worker in Korea," *Journal of Northeast Asian Studies* 51, 2009, pp. 99-119; 박우 "한국의 '재한조선족' 연구 현황" 제외한인연구25, 2011, pp. 207-228.

(27) 李華『トランスナショナルな中国朝鮮族家族の人類学的研究』2013年。

(28) 塚田誠之「序文 中国国境地域の移動と交流をめぐる」塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流：近現代中国の南と北』有志舎、2010年、2頁。

(29) 宮島美花『中国朝鮮族のトランスナショナルな移動と生活』国際書院、2017年。

(30) 権香淑『移動する朝鮮族：エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社、2011年、55頁。

の成立と展開・転換を踏まえ、現代における『人の移動』において顕著な多元的生活実践や多元的帰属意識の生成という文脈から、人文・社会科学におけるこれまでの移動研究の成果を本質的に刷新しうる新しさを焦点化してはいない<sup>(31)</sup>という状況が示される。

以上をふまえて、本稿では、人びとの個別具体的な経験への着目、移動する人びとの主体性や動態性への分析という視角を研究の視座として提示し、従来の朝鮮族の移動性に関する研究を、「多元的生活実践や多元的帰属意識の生成という文脈」<sup>(32)</sup>から刷新することを試みる。

## 1.2 調査概略・研究方法

本研究の研究対象である朝鮮族は、17世紀初頭から長い歳月を経て朝鮮半島から中国東北地方へ絶えず移住してきたコリアンおよび彼らの子孫を指す。彼らは中国国籍を有し、中国の戸籍に「朝鮮族」と登録されている。中華人民共和国成立前の朝鮮族は歴史資料に、「朝鮮族」ではなく、「墾民」、「朝僑」、「朝鮮人」、「韓人」、「在満朝鮮人」、「朝鮮民族」など、さまざまな名で登場する<sup>(33)</sup>。「朝鮮族」という呼称は、中華人民共和国の成立後の1950年代初頭の民族識別(1950～1954年)によるものである<sup>(34)</sup>。彼らの大多数は中国政府が行った民族識別工作において、少数民族(朝鮮族)と認定された。中国居住の朝鮮族は全国31省、自治区、直轄市に散在しており、その9割は中国東北部(吉林省、遼寧省、黒竜江省の3省)に集中している。彼らは「朝鮮族」と呼ばれることで、北朝鮮国籍の北朝鮮人と韓国国籍の韓国人とは区別される。

本研究は、文献調査による先行研究の検討、半構造化インタビュー<sup>(35)</sup>から得たデータを用いて考察を行なった。本稿では筆者が2018年8月から2021年4月まで収集した事例データの一部を用いて分析を遂行する(表1)<sup>(36)</sup>。

(31) 同上、55頁。

(32) 同上、55頁。

(33) 孫春日「東北アジアの視角からみた朝鮮族移民史」25頁。

(34) 肖方, "中国对少数民族进行民族识别," 中国民族3, 1999, pp.2-3.

(35) ウヴェ・フリック著、小田博志、山本則子、春日常、宮地尚子訳『質的研究入門：“人間の科学”のための方法論』春秋社、2011年、117頁。

(36) 表1のデータは筆者が『日本オーラル・ヒストリー研究』18巻(2022年)に投稿した論文「中朝国境における『ポッターチャンサ』と交易ネットワーク：ライフストーリーからのアプローチ」にも提示されているが、当該論文と本稿は研究目的、データ分析、研究結果が異なるものである。

表1：調査概略

調査日	調査地(訪問先)	インフォーマント	生年	性別	
2018年	8/8~13	韓国・清州市	A・B	1943/1941	女/男
			C	1937	男
	8/14	延辺朝鮮族自治州・龍井市	D・E	1947/1947	女/女
			F	1962	男
			G・H	1940/1943	男/女
			I	1943	男
	8/15	延辺朝鮮族自治州・龍井市・开山屯鎮	J	1949	男
			K	1953	男
			L	1961	男
	8/16	延辺朝鮮族自治州・龍井市	M	1939	女
			N	1951	女
	8/17	延辺朝鮮族自治州・延吉市	O	50代	男
	8/18	延辺朝鮮族自治州・琿春市	P・Q・R	1946/1964/1964	男/男/男
			S・T	1939/1941	男/女
8/22	延辺朝鮮族自治州・延吉市	U	1940	女	
		V	1953	女	
2019年	8/20		AA	1947	女
			BA	1956	女
	8/23	延辺朝鮮族自治州・延吉市	CA	1961	女
			DA	1956	男
			EA	1962	女
	8/27		FA	1969	男
	8/29		GA	1961	男
2021年	オンライン	U	1940	女	
		HA	1958	男	
		IA	1960	男	
2023年	3/11	JA	1962	男	
		KA	1967	女	

## 2. 「チョソンパラム」の展開前

本節では、朝鮮族のトランスナショナルな実践について議論を進めていくうえで、重要な背景となる北朝鮮ブーム(朝鮮語・韓国語：チョソンパラム)の展開前の状況とその諸要素について検討する。北朝鮮ブームとは、1957年後半から1964年までにかけて中国東北部の中朝国境地帯における人びとの北朝鮮への大量移住現象を指す。この現象は、朝鮮戦争休戦(1953年)後の北朝鮮における移民の受け入れ政策によるものであり、日本では「帰国運動」、サハリン地域では「学生帰国運動」、中国東北部では「チョソンパラム」と呼称される<sup>(37)</sup>。

(37) 李泳采「政治的民族動員運動としての帰国運動」61-88頁。

## 2.1 「同じ井戸の水を飲む」間柄と移動の経験

19世紀末頃から20世紀初頭に清朝と朝鮮王朝の間には国境が定められていたが、その国境は地理的にも国境付近の両側の住民にとっても曖昧なものであって、すでにその何十年も前から朝鮮半島の人びとは主に経済的理由から清朝の東北部へ移住していた。コリアンが間島に定着することになった要因として、李盛煥は間島の地理的条件と当時の朝鮮北部の人びとの間島に対する領有意識を指摘している。間島は中国本部(中心)から地理的に遠方に位置し、豆満江方向を除いて、東・西南・北の方面は山脈<sup>(38)</sup>によって取り囲まれていた。このような地形は中国人の接近を困難にし、地理的に接近していて豆満江によってのみ隔てられていたコリアンの移住を容易にした<sup>(39)</sup>。

1909年「間島協約」後、朝鮮半島北部からの間島移住者の増加に伴い、日本統治下の豆満江岸には104ヶ所に及ぶ渡船場が設けられ、非課税特例措置が実施された<sup>(40)</sup>。結氷期になると、至るところに牛馬車などが常に通行・往来した<sup>(41)</sup>。両岸の関係をみると、越境耕作、生徒の越境通学と教師の巡回教育、医師の巡回診療、親戚訪問や婚姻なども頻繁に行われた<sup>(42)</sup>。鴨緑江、豆満江を境界として明確な国境線が引かれ、中朝国境が画定されたのは1962年「中朝境界条約」の協定締結による。それ以前には、豆満江以北一帯にある朝鮮民族の集住地(間島)は清朝以来封禁地帯となっており、朝鮮側も豆満江以北への移住を禁止していたため、間島は一種の「中立地帯」<sup>(43)</sup>のようなものであった。一方、中国東北地域のコリアンは、間島を朝鮮半島の「延長」として見なす傾向があり<sup>(44)</sup>、間島における村落は咸鏡北道から移動してきたコリアンによって自然に形成されたものが多く、親族関係、同郷(同村)関係を中心とする集落であった<sup>(45)</sup>。次のJA氏の語りでは、JA氏の祖父と祖母の出身と彼らの朝鮮半島から中国東北部への移動の経験が示される。

### 【事例】JA氏(1962年生、男性)

「祖父は慶尚北道安東市出身で、三代続きの一人息子だったが、物心がつく前に両親を(病気で)失い、1911年(当時7歳)頃に外家(母方の実家)の「親戚」に付いて開山屯鎮(龍井市)に移住した。祖父はそこで富家の作男として雇われたが、その後、その富家の娘(JA氏の祖母)と結婚することになった。だから、その富家の金持ちの娘が、私の祖母だよ。祖母の父(JA氏

(38) 東は黒山山脈、西南方面は老嶺山脈、北は哈爾巴嶺山脈。

(39) 李盛煥「国境を渡った『国家』：間島朝鮮人社会」李盛煥、木村健二、宮本正明編著『近代朝鮮の境界を越えた人びと』日本経済評論社、2019年、114頁。

(40) 韓国史料研究所編『朝鮮統治史料第9巻』沿境関係、1972年、889-893頁。

(41) 同上。

(42) 同上。

(43) 李盛煥「国境を渡った『国家』」112頁。

(44) He-Ran Park, “Korean Women's Lives in China through Their Oral History,” *Women* 11, 1995, pp. 11-56.

(45) 朴歆「中朝国境における『ポツタリチャンサ』と交易ネットワーク：ライフストーリーからのアプローチ」『日本オーラル・ヒストリー研究』18巻、2022年、16頁。



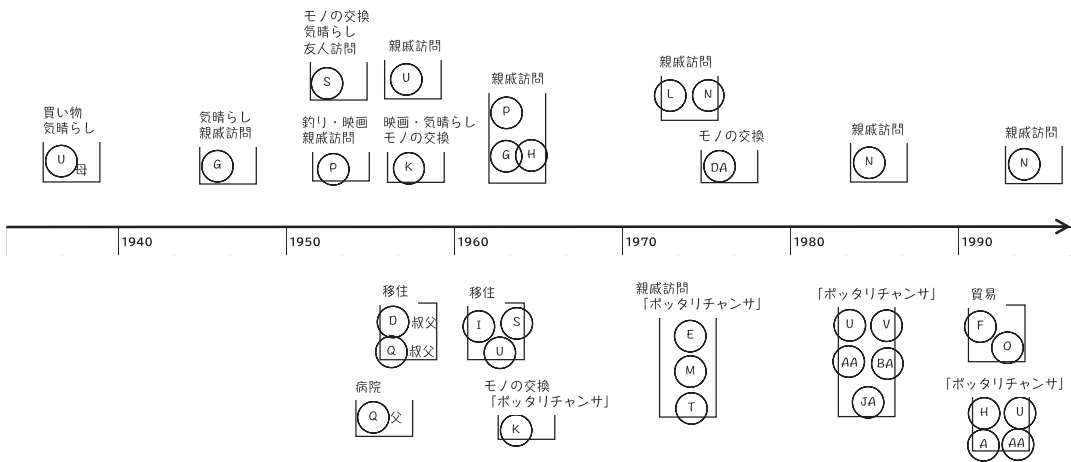
の曾祖父)は医者で、祖母は咸興(咸鏡南道)出身だが、咸興から中国東北地域に移住して開山屯鎮に定着した。

当時、作男だった祖父が金持ちの娘(JA氏の祖母)と結婚できたのは、祖父の顔がハンサムだったからだ。祖母は富家の娘だったが、病気になったことがあって、そのときに飲んだ薬のせいで、口が若干歪んだ状態の顔になってしまった。それで嫁に行けないから、作男だった祖父と結婚させたのよ。そうして私の父(1936年生まれ)が生まれるようになった。母(1939年生まれ)も朝鮮出身で中国東北地域に移住してきたが、朝鮮のどこの出身だったか、その地域は覚えていない。外祖母(母方の祖母)は敬信(琿春市敬信鎮)に住んでいた。

さらに、本研究の複数の調査事例では、「国境を境にその周辺の村には親族関係の人びとが多かった」状況を見出すことができた。それは、自然村を基盤に歴史的連続性によって構築された関係が国境を跨いで形成されていた状況を示している。

## 2.2 日常的営為としての移動と生活世界

中朝国境に明確な国境線が引かれ、国境が画定される前の「中立地帯のような」<sup>(46)</sup>豆満江岸において、人びとはどのように行き来していたのだろうか。また、なぜ国境を越え移動したのだろうか。本節では、具体的な事例を通して、彼らの移動とその生活世界のあり方を明らかにし、日常的営為として国境をまたぐリアリティを提示する。



Informant : A/D/E/F/G/H/I/K/L/M/N/O/P/Q/S/T/U/V/AA/BA/DA/JA

図1: 中朝国境の豆満江以北一帯における人びとの移動目的(聞き取り資料により筆者作成)

図1は筆者が行った調査に基づき、1940年代から1990年代初頭にかけて中朝国境を行き来した22名の聞き取り協力者の移動目的を示したものである。図1の矢印は時間軸を示し

(46) 李盛煥「国境を渡った『国家』」112頁。

ている。また、矢印の上部には1940年代から1990年代にかけて、22名の聞き取り協力者が移動しながら継続して行っていた日常生活の実践が示されている。矢印の下部には1950年代後半から新たに現れた実践として、「移住」、「ポッタリチャンサ」、「貿易」が示されている。

図1が示しているように、1950年代後半までの人びとの移動目的には、「気晴らし」、「釣り」、「映画鑑賞」、「友人訪問」、「親戚訪問」、「ものの交換」、「移住」が含まれている。彼らはどのように移動しながら日常生活を営んでいたか。以下では、具体的な事例を通じてその実態を探る。

【事例】K氏(1953年生、男性)

「昔は朝鮮を自分の家のように『出入り』したからね。豆満江のここでは、誰も彼も朝鮮に渡って行ったことがある。私の家族もみんな渡って行ったことがある。一番上の兄を除いて、きょうだい5人が一緒に朝鮮に『出入り』した。

1950年代に中国から北朝鮮に映画を観に川を渡って行くことは、その時代の国境地帯の人(特に川筋の村の人)にとっては、決して珍しいことではなかった。当時の北朝鮮では『農村地区放映隊』が村を回りながら映画を放映した。村の煙草乾燥小屋の壁に布を貼って、広場の中心に機械を置いて映画を上映した。その当時は川を渡って映画を見に行っても逮捕されたりすることはなかった。60年代ごろも、その時に、ここ白龍村(図們市月晴鎮白龍村)には映画というのはなかった。映画を観るためには、白龍村から図們の方に行かないといけなかったが、それだと一日かかって夜に(白龍村に)帰ることになるからね。だが、朝鮮は1ヶ月に2回も映画を上映するから、半月に1回映画を上映すると、同じもの(映画)であっても、ここ(白龍村)にはないから、そこ(朝鮮)に渡って行った。

北朝鮮の子どもたちは、映画上映のある日は屋根で上着を振り回して(中国側の子どもたちに)知らせた。当時の北朝鮮では、放課後にはサイレンを鳴らした。その大きい音が鳴ると、中国側の子どもたちはその辺に視線を向ける。北朝鮮の屋根で子どもたちが上着を振り回していたら、その日の夜には映画があった。私たちはすぐにわかって、『あそこで映画をやるから、今夜川を渡ろう』と話し合う。そうして、事前に準備して渡って行って映画を見たり、干したスケソウダラとかをもらってきて食べたりした。その時に、私たちは、懐中電灯のような軽工業品を北朝鮮に持って行って、スケソウダラやマダコと交換したりした。中国はそういうもの(軽工業品)をたくさん売っていたからね。朝鮮はそれが(軽工業品)なかった。主に、そういうもの(軽工業品)を(朝鮮に)持って行って干したスケソウダラとかと交換した。

昔は、1965年ごろまでにも(1950年代から1960年代まで経験したこと)、北朝鮮の子どもたちと一緒にソリに乗ったりもした。その時は国境線のところ(中国側)で監視されたりすることもほとんどなかった。朝鮮にも、保衛指導員だけで、その時の私たちは子どもだったけど、軍隊や軍人にはあったことがなかった。北朝鮮の子どもたちと一緒にソリに乗ったりして遊びながら、ものを交換した」。

ここでは、豆満江を挟んで中朝両側には地理的に非常に接近して位置する村があったことと、両側に居住する子どもたちが「屋根で上着を振り回して映画上映を知らせる」ことや結氷期の豆満江で「一緒にソリに乗る」という日常的な交流のありようが示される。それは現在の中朝国境(写真1)の様子とは程遠いものである。



写真1：豆満江沿岸(中朝国境)には鉄格子が設置されている(2019年8月14日筆者撮影)

1950年代末における豆満江以北一帯では、「漁り」、「ソリやスケート遊び」などの日常的な交流が比較的自由に行われていた。K氏の語りにも示されたように、1950年代後半の豆満江以北一帯に居住する人びとにとって国境を越えることは珍しいことではなかった。K氏の映画鑑賞を目的に国境を越えたK氏の行為に象徴されるように、それは日常生活の一部として行われていた。

### 3. 「チョソンパラム」の展開(1957年後半～1964年)

1953年7月の朝鮮戦争休戦後、北朝鮮は大勢の朝鮮人移民を受け入れることを決定した。1950年代後半には、日本からの「帰国運動」やサハリン地域からの集団移動がこれに応じた動きとなる。同様に、中国東北の中朝国境地帯では北朝鮮ブームが始まり、大勢の朝鮮族の人びとが国境を越え北朝鮮に渡っていった。

『延辺朝鮮族自治州史』の延辺における「中朝間の非合法越境状況に関する」統計の記録を見ると、1951年は北朝鮮から中国側へ向かって移動する流れが顕著であるが、1961年になると、移動の向きが逆転し、今度は中国から北朝鮮側へ向かって移動する動きが見られる<sup>(47)</sup>。また、1951年の越境状況が把握できた人数1万4889人のうち約6割以上の越境理由が「越境遊覧」であり、1961年の人びとの越境理由は、1万1135人のうち約7割以上が「求職」である<sup>(48)</sup>。モーリス・スズキの『北朝鮮へのエクソダス：「帰国事業」の影をたどる』には、

(47) 延辺朝鮮族自治州地方志編纂委員会編、「延辺朝鮮族自治州志」(上巻)、中華書局、1996、p.548。

(48) 同上。

その点に関連して、北朝鮮は朝鮮戦争後の国家再建とともに労働力の穴埋めを意図し、中国東北部に住むコリアンの「故国帰国」の奨励を中国側に要請したこと、そして中国では4万人ほどのコリアンの帰国を約束したことについて記述されている<sup>(49)</sup>。すなわち、労働力不足問題に対する北朝鮮の移民政策は中朝間の人びとの移動の向きや移動目的の変化と深く関連している。

日本、中国、サハリン地域におけるコリアンの北朝鮮への集団帰国運動(帰国事業)を分析し、政治的な民族動員運動としての在日朝鮮人帰国運動を検討した李泳采は、北朝鮮への「民族動員運動」は、日本だけでなく、中国では「チョソンパラム」、サハリン地域では「学生帰国運動」としても実施されていたことを指摘している<sup>(50)</sup>。李泳采によれば、日本で帰国運動が大衆的に行われていた50年代後半、中国の延辺地域でも(1956年後半から1964年頃まで)、移住を目的とした大勢のコリアンが北朝鮮へ「帰国」し、そのような大量移動の現象を延辺地域では「チョソンパラム」<sup>(51)</sup>と呼んでいたという<sup>(52)</sup>。

本節では個別的事例を通して、「1957年後半から1964年頃までの「チョソンパラム」の展開のなか、彼らはなぜ中国から北朝鮮に移動したか」「彼らの北朝鮮への移住を決める要因は何だったか」、また、「なぜ彼らは再び国境を越え中国に戻ってきたか」について検討する。

### 3.1 移住の経験

#### 【U氏の事例】

U氏は1940年に中国で生まれた。U氏が生まれる前、U氏の父は5人きょうだいのうちの2人と一緒に朝鮮から中国に移住した。この際、U氏の父は、妻(U氏の母)と3歳の長女(U氏の姉)を伴って3人で一緒に移住した。その結果、U氏の母は中国に、U氏の母の親族は朝鮮に居住するようになった。U氏が生まれてはじめて北朝鮮に渡って行ったのは1957年だった。U氏の父は親戚の結婚式に参加するため通行証を申請し、U氏を連れて北朝鮮に渡って行った。1961年には、U氏は通行証を申請し、今度は一人で気晴らしを目的に国境を越え北朝鮮の親戚を訪問した。

(49) テッサ・モリス=スズキ著、田代泰子訳『北朝鮮へのエクソダス：「帰国事業」の影をたどる』朝日文庫、2011年。

(50) 李泳采「政治的民族動員運動としての帰国運動：日本、中国、サハリン地域におけるコリアンの北朝鮮への帰国運動を中心に(特集 朝鮮現代史と在日朝鮮人)」『朝鮮史研究会論文集』50号、2012年、61-88頁。

(51) 「チョソンパラム」とは、朝鮮語(韓国語)であり、「チョソン」は「朝鮮」を、「パラム」は「風」を意味する。先行研究では「チョソンパラム」は北朝鮮当局により展開された中国延辺地域での集団帰国運動として記述され、「外流風」・「外流時代」などとも呼ばれている。以下、本稿では「チョソンパラム」として表記し、用語を統一する。

(52) 李泳采「政治的民族動員運動としての帰国運動」61-88頁。

## 【事例】U氏(1940年生、女性)

「私は学校を卒業してから、1961年『チョソンパラム』の時に、通行証を申請して一人で吉州に気晴らしに(朝鮮の)親戚の家を訪問した。一人で気晴らしに行ったら、親戚たちに、『君は満州に行ってもうすっかりデノム<sup>(53)</sup>になってしまったな、君一人でもここ(朝鮮)にいるのであれば、君の親も君に付いて(朝鮮に)出て来るよ。だからぜひ連れて来て』と言われた。その時は(朝鮮の方が)中国より生活が豊かだった。57年にはそんなにひどい状況だったのに、61年には、私たち(中国側)と全然違って、食糧も、レストランも何もかもよくできていてね。それを見て、(朝鮮に)来て生活できたらと思って、(中国の)家に戻って(親を)説得したのよ。

また、朝鮮では、ナイロン工場が建てられていてね。ここ(中国側)にはその時にナイロンというのがなかった。それで、ナイロン製の靴下やジャケットなどを全てそこ(朝鮮)に行って持ってきたのよ。その時は、『チョソンパラム』だから、みんな(中国を)出る時期だったからね。それは、みんな豆満江を渡って行って、(正規の)手続きなしで生活する時期だったよ。また59年前は、(朝鮮の)復旧建設といって、(中国で)志願する人は誰でも行くことができた。通行証も要らずに、移住としてね。59年には移住として募集した。隣に住んでいた私の又従姉妹もその時に移住として(中国を)出たのよ。それで、私が朝鮮に行ったとき、その姉とも会ったが、(姉の)生活が中国で生活していた時より豊かだった。(中国では)農作業をしていた人が、(朝鮮では)『工民』(工員、職人)の仕事をしていた。そして、私の父のイトコたちがそこ(朝鮮)に多かったのよ。それが一番の財産だからね。

それで、その時、通行証で朝鮮に渡って行った私は(中国の)家に帰って、そのような状況を話した。そうして、うち(U氏の家族)も(中国を)出ることを決めたのよ」。

U氏は、その後、親戚(北朝鮮居住)の説得、1959年に移住した又従兄弟との出会いなどをきっかけに、北朝鮮への移住を決心することになる。その理由は、当時、北朝鮮の生活水準が中国より高かったこと、移動先の北朝鮮において、親族が多かったことだった。移住を決心して中国に戻ったU氏の説得によりU氏の親・伯父も移住を決心する。

U氏が北朝鮮の親族を「一番の財産」として語る事例から示されるように、国境を越えた親族関係は、移動する人びとの移動先における不可避な不確実性を緩和する戦略・手段でもあった。

「私は、先に(中国を)出て(朝鮮で)家などをとって事前準備をするようにと言われて、22歳の時に先に朝鮮に渡って行った。それは(朝鮮に)親戚がいるから、先に行くこともできたよね。その後は、(朝鮮と中国を)ずっと行き来する人たちがいるから、その人たちを通して(中国にいる家族・親族からの)連絡をもらうことができた。伯父は(中国で)大きくて立派な家に住んでいたが、その家を売って、(中国を)出る準備をしていて、うち(U氏の親の家)にいと、(中国を)出ることは決まったという連絡があった。それで、私は、朝鮮で家も探しておいて、製紙工場に就職して働きながら金を稼いでいた。だが、その1年後、急に(親と伯父が中国を)出られなくなったという連絡が来たのよ。伯父は農村では有名な医者で、もっ

(53) 떼놈(되놈) : 中国人(漢族)に対する差別用語。

と大きい病院からのスカウトもあったがそれを断つてずっと農村に残っていた。その伯父が(中国を)出ようしたら、村支部の関係者たちがそれを知って、行かせてくれなかったのよ。それでみんな(朝鮮に)来ないということになったからね。それで、私は、(朝鮮の)親戚たちに、親もいないところに一人でいたくないと伝えて、工場(働いていた製紙工場)と近い又従姉妹の家にしばらく泊まってから、その後、豆満江を渡って、船口(龍井市開山屯鎮船口村)を經由して夜に戻って来た。その日に荷物は持ってこられなかったが、その次の日の夕方に(中国の)妹を連れて行って、荷物を(朝鮮から中国に)運んだ。その時は、ものが貴重だったからね。イブル(布団)も、貴重だったから、イブル、衣類などを運んだ。その時は、川(豆満江)の水が溶ける前の2月か3月の冬だったので、凍りついた川を歩いて(中国に)戻った」。

親・伯父が移住の下準備(中国側の家の処分など)をする間、U氏は先に北朝鮮に移住した(当時22歳)。しかし、その1年後に、U氏は、親と伯父の移住計画が霧散になったという情報を受け取ることになる。村の有名な医者だった伯父が村支部の反対により、移住を断念することになってしまったということであった。親族の移住を待ち構えて、事前準備を終え、製紙工場に就職して働いていたU氏は、北朝鮮の親族に「親もいないところに一人でいたくない」と、親と離れて生活したくないという気持ちを伝え、1963年3月に冬の凍結した川を渡って中国に戻るようになった。

## 【S氏の事例】

【事例】S氏(1939年生、男性)

「50年代の朝鮮戦争(1950～1953)が終わってから、朝鮮に人が少なく、中国のチョソンサラムたちを受け入れようとした。その時は、私もこっそり(朝鮮に)渡って行ったことがある。一回は、1ヶ月間滞在して、2回目は2ヶ月ほど滞在した。あまり遠くまでは行かずに、(一番遠いところは)清津までは行って来たことがある。私は、故郷は春化(琿春市春化鎮)で、山奥の田舎の家に住んでいた。だから、(国境からは距離があるので)頻繁に(朝鮮を)行き来することはできなかった。昔は、子どもたちが豆満江でよく遊んだりしたが、私は、うちはそこ(国境付近)に家があるわけではなかったの、そうできなかった。」

S氏は豆満江の川筋からは比較的離れていた村に居住していたため、国境地帯において特定の日常的な関わり合いが行われていたことは認識していても、それを直接経験することはほとんどなかった。しかし、S氏は、朝鮮戦争休戦後、1961年までは正規の手続きを取らずに豆満江を渡って国境を行き来していた。

「その時は、中国では生活が厳しく、ほんとうに何もなかった。私たちが学校に通うときには、食事もまともにできなかった。だが、その時、朝鮮では食事を提供して、一般家庭でも食べさせてくれたから、(朝鮮に)渡って行った。服も、靴下も、朝鮮のものがずっとよかった。中国には靴下も靴も販売していなかった。私は、一般家庭(非親族)に通ったりしながら、行き来した。一か所に集められ、住居や食を提供するところもあった。そこは、(朝鮮

に渡って行った『中国の人』(チョソンサラム)を接待する接待所みたいところだった。一般家庭(非親族)に通ったり、歩き回るなかで親しくなった(朝鮮の)人の家に通ったりする人もいた。私は、(正規の手続きなしで)1961年に最後に(朝鮮に)行って来た」。

ここでは、当時、中国国内の物品・食糧不足などの経済的状況と、中国より経済的に安定していた北朝鮮の状況を背景としたS氏の行動が語られている。1960年代、北朝鮮では、中国からの「チョソンサラム」移住者を歓迎し、家の無償譲渡・職の紹介と職業配置を与えていた。一方、S氏の語りから、そうした国の政策から公的に設置された「接待所」に泊まることもあったが、「歩き回るなかで親しくなった人の家」など、一般家庭に居住し、食事をするなどの比較的自由な交流も行われていたことを見出すことができる。

「1961年は、朝鮮の生活の方が豊かだった。服なども、(朝鮮から)持って来て着た。私も、その時に、朝鮮に移住しようとして、渡って行った。長春(長春市)の大学を卒業して、そこ(朝鮮)に移住して生活しようと、卒業証書を持って、琿春には戻らずに、そのまますぐ朝鮮に渡って行った。そうして、卒業証書を用いて職業を分配されたが、小学校や高校を卒業した他の人たちは炭鉱、鉄鉱や農作業などに行かせたが、私は大学を卒業したので、『よく』分配してくれて、ピョンヤン(平壤)の建設工事を行う総合事業所に設計関連として行かせた。その後、春化に(孤児だった)私を育ててくれたお年寄り(女性)が一人いたので、その人を(朝鮮に)連れて行こうと、迎えに(中国に)戻った。私一人で逃げてはいけなからね。しかし、迎えに戻ったら、そのお年寄りは、(朝鮮に)行きたくないと言って、私を一週間ほど見張っていた。それで、私は『そうしたら、私も(朝鮮に)行かないことにします。結婚もここ(中国)でして、朝鮮へ逃げたりしません。だから、心配しないでください』とその人に伝えた。私はここ(中国)に残ると言ったら、その人は少し安心したようだったが、それでも数日間見張っていた。そうして、私は朝鮮に行かなくなった(移住をあきらめた)」。

S氏の移住の経験から、移住先における職業分配には移住者の学歴が問われ、高学歴であるほど「よい分配」を与えられ、より理想的な職を得ることができた状況が示される。S氏は、中国で大学を卒業してから北朝鮮への移住を計画し、実際に「移住」してピョンヤン(平壤)に就職したが、孤児だった彼を育てた養母との意見の不一致で、最終的には移住を断念した。そのため、S氏は1961年を最後に再び豆満江を正規の手続きを取らずに渡ることとはなかった。

「その時に、中国から(朝鮮に)渡って行った人びと(チョソンサラム)は、中国の公民だったが、朝鮮に渡って行くと全員朝鮮の公民になるのよ(登記される)。私も、その時に朝鮮に行って、職業を分配されて朝鮮の公民になっていた。だが、中国での『戸口』(戸籍)はそのままあるからね。こっそり(朝鮮に)行って来たから、ここ(中国)では、それを知らないからね。」

S氏の語りから示されたように、「チョソンパラム」の展開のなか、中朝国境における人

びとの往来は、かなりの自由度の高さが窺われ、北朝鮮に移住後、北朝鮮から再び中国側に戻ることも比較的自由に行われていた。同時に、S氏の事例は、移動する人びとの意識の変化を表している。「中国の公民」、「朝鮮の公民」という語りから示されるように、彼らは中国と北朝鮮の国境は個人的な往来に対して閉ざされていることを強く意識しており、そのことは国境を越える移動をトランスナショナルな移動として認識している状況を表すものとして考えられる。

## 【I氏の事例】

【事例】I氏(1943年生、男性)

「ここで、チョソンパラムが流行って、この近辺(龍井市開山屯鎮)の人びとはみんな(朝鮮に)行ってきたよ。60年代に、渡って行った人の中には、親戚が朝鮮にいる人もいたけど、そうでない人もいた。当時(朝鮮に)渡って行くと、全員一か所に集められ、食べさせてくれた。朝鮮では、学校のようなところに、全員集められ、食べさせてくれたり、(職)配置もさせてくれたりした」。

I氏の語りから、国境付近の豆満江の川筋の村に居住していた人びとの状況を見出すことができる。地理的距離の近さによって、彼らの国境を越える移動・移住は比較的容易に行われていた。また、北朝鮮で中国からの移住者を歓待し、家の無償譲渡・職の紹介と職業配置を与えていたことから、北朝鮮に親戚を持たない人でも移住を希望して国境を越えて移動した状況がみられる。

「私もその時は朝鮮で住んでいた。1961年に(中国から)朝鮮に行って、1964年に(中国へ)戻ってきた。当時は朝鮮の方が、ここ(中国)より、食べ物などがまじだった。お米とかもあって、そこ(朝鮮)は、集団化されていたので、「配給」を食べた。

そこ(朝鮮)に渡っていくと、就きたい仕事の希望を出すことができる。だが、希望通りにはならなかった。なぜなら、私たちはここ(龍井市開山屯鎮)から(朝鮮に)渡って行ったから、そこではその前の方(中心部の地域)には行けないのよ。ここ(龍井市開山屯鎮)から(朝鮮に)最初に渡って行ったときは、水の管理をする灌漑管理所に配置された。しかし、そこはあまり理想的ではなかった。それで、ピョンヤンに私の母方のオジがいるから、より中心部の地域に行こうと、会寧<sup>(54)</sup>に行って(職)配置されたくて、会寧で配置されると、前の方(中心部の地域)に行けるから、それで、三合鎮(龍井市、会寧から一番近いところ)から渡って行って、そこで(職)配置されて、私は降仙製鋼所に行った。そこは、ピョンヤン(平壤)からナンポ(南浦)の方に、40里<sup>(55)</sup>の降仙というところの製鋼所だった。私はその降仙製鋼所のボイラー管理の仕事に従事した。そこで仕事をしたが、それも理想的ではなかったので(中国に)戻って来た」。

(54) 咸鏡北道会寧市。

(55) 1里=約400m。



中国より経済的に安定していた北朝鮮の状況を背景としてI氏は、1961年に北朝鮮へ渡って行った。ここでは、北朝鮮での職の紹介と職業配置は、移住者の希望通りにはならなかったことや、移住者が「登記」を行う場所によって(職)配置される地域の範囲が異なっていたこと、北朝鮮では地域間の移動の制限があったことなどが窺われる。I氏は、最初は生まれ育った村から国境を越え、北朝鮮に渡って行って移住者として登記し、職を配置されたが、そこは「あまり理想的ではなかった」として、再び中国に戻った。その後、「親戚が居住するより中心部の地域に職を持つため」今度は場所を変えて国境を越え、前回とは異なる(北朝鮮の)地域で再び移住者として登記を行うことで、より中心部の地域に職を持つことになった。

「その時、家族は、各自(朝鮮に)渡って行ったが、最終的には家族全員が朝鮮に行った(移住した)。全員一緒に行ったわけではなく、兄が先に(朝鮮に)渡って行って、私とその次に(1961年に)行った。両親と他のきょうだいはその後朝鮮に渡って行った。その時、父は鍾城(咸鏡北道)の農村に配置されて、そこで農作業をした。そのようにして朝鮮に行って生活したけど、あまり理想的ではなかったから、再び(中国に)戻って来た。(朝鮮での)食事とかも悪くなかった。その時は、(中国で)私たちの生活は貧しかったからね。

1964年の冬に、家族全員が(中国に)『引越し』した。朝鮮から戻ってくる時には、うちで飼っていた豚(一匹)を含めてすべてを持ってきた。何回も(国境を)行き来しながら荷物を運んだ。暮らしの所帯道具などを持ってきた。その後は(朝鮮に)行かなかった」。

I氏とI氏の兄(一番目)は、個人単位で移動していたが、その他のきょうだいは両親と家族単位で移動・移住した。北朝鮮に移住して農作業に従事していたI氏の両親は、1964年にI氏が中国に戻ったという連絡を受け取って、家族全員を連れて再び中国に戻った。

「私たちがその時に(朝鮮に)行ったのは、私たちが(中国では)農民で、私が農民だから、朝鮮に行って職を変えようと、『工民(工員、職人)』になってみようかと思って、それで(朝鮮に)渡って行った。しかし、あまり理想的ではなかったから、再び中国に戻って来た。お金がもうからないからではなく、物事が自分の思い通りにいかないから(仕事に関して私の希望通りにはならなかったから)、戻って来た。そう、その時に戻って来てよかった」。

より良い職業と生活改善を求めて北朝鮮に移住したI氏は、念願の理想の生活と現実の乖離を感じ、再び中国での生活を選択するようになった。I氏の移住の経験が示すように、社会的上昇や経済的成功を得るための戦略として行われた移住は、必ずしも永住につながるとは限らなかった。I氏の場合は「職配置が理想的ではない」、「お金は儲かるが仕事に関して希望通りにならない」などの個別具体的な諸要素が影響を与えていたことが窺われる。

## 【P氏の事例】

【事例】P氏(1946年生、男性)

「60年代には、朝鮮の人びとのほうが中国の人びとより、生活が豊かだった。その時は、中国から(朝鮮へ)ものを持って来たからね。米も服も、ものなどを持って来た。その時に、(朝鮮に移住した)姉の隣の家に師団長が住んでいたから、姉の夫がその人からナイロン製の服をもらって、それをまた私がもらって(中国に)持って来た。それを私は(中国にいる他の)姉たちにも渡した。それで、うちは早めにナイロン製の服を着ることができた。だが、その時の私たちの村(王家村)では、羨ましがる人はいなかった。なぜなら、みんな(朝鮮の親戚からものを)もらってくるから。

(60年代初頭に)中国は食糧不足で、樹皮を食べる人も多かった。その時、私はいつも朝鮮に行つて(姉の家から)米を背負つて(中国の家に)帰つて来た。姉や甥っ子が米を背負つて(中国に)持って来てくれることもあった。米は毎回30斤<sup>(56)</sup>以上持って来た。持って来た米はなくなつたらまた(朝鮮に行つて)持って来た。その時に中国で「配給」したのがタカキビと燕麦だった。それも少量だったので、それだけでは食べていけない。だから(朝鮮の)姉の家で米を背負つて来た。うちの村ではみんなそうだった。みんなそうやって食べた。(朝鮮に)親戚がいない人でも、(親戚がいる)隣家の人と一緒に連れて行って米をもらって帰つたりした。また、そういう人たち(親戚がいない人)は、中国の梳き櫛を持って北朝鮮に行つて米と交換することもあった」。

1960年代前半の中国国内の食糧不足などの経済的状況のなか、P氏は頻りに国境を越えて北朝鮮の姉を訪問し、米などをもらって中国に帰った。当時、川筋の村では、中国より経済的に豊かだった北朝鮮に渡って行って、北朝鮮の親族などを通して食糧を支援してもらうことは珍しくなかった。ここでは、中国居住の多くの人びとは、経済的に北朝鮮に居住する彼らの親族にかなり依存する場合があったことが示される。

「姉はその後、慈江道<sup>(57)</sup>に引越した。姉の夫の友人(姉の隣の家の師団長)がハミョン(咸鏡北道慶源郡の下面区)にいたので、姉が引越していなくなってからは、その人の家に行つて米をもらって来たりした。1ヶ月に3回は行つてもらって来た。その時は(国境管理の)制限が厳しい時期だったので、(朝鮮に)自由には渡つていけなかったけど、私はこっそりその人の家に『通つた』。その人の家には4年間通つた。だが、その後、その人は急にいなくなった。その人の家のドアを叩いたら、知らない人が出て、その人の行方を聞いたら、『私たちは分らないです』という返事しかなかった。それで、その人がいなくなってからは、それ以上(朝鮮に)通えなかった。

私もその時(60年代)、朝鮮で住もうとしたことがある。その師団長を通して、ラジン<sup>(58)</sup>の学校に、中学1年として入学できた。しかし、学校の規律が厳しく、朝の起床時間も決まっ

(56) 1斤 = 600g。

(57) 北朝鮮北部鴨綠江中流に位置する道。

(58) 現在の羅先市南部を指す。

でいてね。必ず並んで食事をしなければならないし、午前中には45分の授業(15分休憩)が4つあって、午後にはまた外に出て訓練を受けることになる。それを三日間やった。三日間しかやらなかったけど、それ以上続けられないと思ってあきらめて中国に戻った」。

1960年代に、未成年だったP氏は、北朝鮮に移住するため、知人を通して北朝鮮の学校に入学できた。しかし、「学校の規律が厳しすぎる」などの現地の社会的規範に従うことが難しく、理想との乖離を感じたP氏は移住をあきらめて、再び中国に戻るようになった。すなわち、P氏は、中国の生活様式により適応していることを感じて、中国での生活を選択した。

### 3.2 移住の決定要因

李泳采は在日朝鮮人帰国運動の展開過程を分析し、同時期の中国延辺地域・ソ連サハリン地域での集団帰国運動を併せて考察することで、政治的な民族動員運動としての在日朝鮮人帰国運動の全体像を描き出そうとした<sup>(59)</sup>。そこでは1957年後半から1964年頃の延辺地域からの大量移動は、政治的な弾圧と経済低迷で混乱に陥っていた中国より経済的には安定期を迎えていた北朝鮮への「帰国」を求めた結果であり、少数民族に対する政治的な弾圧が大量帰国の主な理由だと主張している<sup>(60)</sup>。一方、鄭雅英は1960年代に中国東北部の朝鮮族が中国から北朝鮮へ移動した原因は「食糧や経済問題解決」にあり、彼らの移動は「一時的滞在」であって、中国側の状況の改善とともに再び国境を越え、中国(延辺)に戻ったと主張している<sup>(61)</sup>。このように、従来の先行研究では、彼らの移動がマクロな視点から一般化された表層面のみの動向によって彼らの移動が説明されてきた。それゆえ、実践者個人の主体性や動態性への分析は十分に検討されてこなかった。

カースルズとミラーが述べているように、移動する人びとの移住・移動の決定要因は、送出国と受入国の変化する諸状況に影響を受けるとともに、それは「静態的ではなく、グローバルな要因と、それらがローカルな歴史的・文化的な要素と関係する際のパターンの変化につられて常に変化し続けている」<sup>(62)</sup>ものである。そのため、移動する人びとは、経済学的分析だけでは明確に把握できず、より多様な観点からのアプローチが把握する上で必要となり、それは経済・政治・社会文化的要因が全て影響する「複合的な過程」として移動する人びとを再概念化することとつながる<sup>(63)</sup>。

「朝鮮の生活水準が中国より高かったこと」で北朝鮮への移住を決心したU氏とS氏の事

(59) 李泳采「政治的民族動員運動としての帰国運動」61-88頁。

(60) 同上。

(61) 鄭雅英『中国朝鮮族の民族関係』アジア政経学会、2000年。

(62) カースルズほか『国際移民の時代』32頁。

(63) 同上。

例、より良い職業と生活改善を求めて北朝鮮に移住したI氏の事例から示されるように、「チョソンパラム」の展開およびその過程を経験した人びとの移動パターンには次のような特徴があることが明らかになった。すなわち、彼らは、①複数回の短期訪問、②朝鮮戦争休戦後の北朝鮮の政策的なチョソンサラムの受け入れによる移動、或いは、③親族・知人から得た情報を契機に、より良い職業・生活改善への希望を持って北朝鮮へ渡って行った。ここでは、物品・食糧調達のほか、社会的上昇や経済的成功を得るための戦略としての移住を見出すことができる。加えて、移住を決心したU氏が移住先の北朝鮮に居住する親族を「一番の財産」と述べている事例では、国境をまたぐ親族ネットワークの持つ意味が示される。すなわち、国境をまたぐ親族ネットワークは、移動する人びとの移動先におけるリスク回避などの不確実性を緩和する戦略・手段としての意味合いを有していると考えられるのである。

本節で紹介したI氏・S氏・P氏の移住の経験から示されるように、社会的上昇や経済的成功を得るための戦略として行われた移住は、必ずしも永住につながるとは限らなかった。むしろ、彼らは頻繁に国境を行き来しながら生活の安定を追求していた。

それでは、なぜ彼らは再び国境を越え中国に戻ってきたか。本節で取り上げた事例をみると、I氏の場合は「職配置が理想的ではない」、「お金は儲かるが仕事に関して希望通りにならない」こと、P氏の場合は「規律が厳しすぎる」といった現地の社会的規範に理想との乖離を感じたことがその理由であった<sup>(64)</sup>。一方、「家族と一緒に生活できない」ことで中国に戻ったU氏の事例と、「育ててくれた養母が移住を望まない」ことで移住を断念したS氏の事例から示されているように、絆に基づく情緒的結びつきも移住の重要な決定要因として現れている。

彼らは、政治・文化的にリミナルな状態におかれていながら、変化する政治・社会環境に立ち向かい、自らを適応させながら生活世界を構築した。彼らは、国境を越える空間に埋め込まれたリミナルな主体であった。サンフランシスコのジャパントウン(日本街)における朝鮮半島出身の移民を中心とする在米コリアンの生活空間について調査を行った河上幸子は、日本街の在米コリアンたちが必ずしも日本街のコミュニティへ完全なる参加を求めているわけではないことに注目した。在米コリアンたちは、アメリカ市民としてのコミュ

(64) これに関して、オリビエは興味深い議論を提示している。すなわち、「祖先の地から離れて暮らす人びとの場合、特定の国や政権に対する忠誠よりも、祖先の文化や生活様式に忠実であることをより重視する」と述べ、それは、彼ら「自らの『ディアスポラの文化』は祖国にとどまっている同胞の『文化』とはちがった変容の過程をたどってきたから」だと主張している。Bernard Olivier, "Ethnicity as a political instrument among the Koreans of Northeast China, pre-1945 to the present," *Korean and Korean American Studies Bulletin* 12, 2001, pp. 6-19. バーナード・オリビエ、柏崎千佳子訳「中国東北部コリアンの政治的手段としての民族性(エスニシティ): 1945年以前から現在まで」『ディアスポラとしてのコリアン: 北米・東アジア・中央アジア』新幹社、2007年、270-282頁。

ニティ参加の権利・義務の規範の強調という言説にストレートに向かい合って抵抗したり、折衝したりする代わりに、自らの関心や利害に関わってこない領域からは静かに距離をとるという方法をとること、すなわち、「アフィニティ空間」というリミナルな状態に身をおくことで、従来のナショナル・アイデンティティから「見えない人種」<sup>(65)</sup>になることを選択していると指摘している<sup>(66)</sup>。

1950年代以降の中国東北部のコリアンが「朝鮮族」、「朝鮮民族である中国公民」になっていく時期において、中国と北朝鮮の国境は「個人的」な往来に対しては閉ざされ、「公的」な往来のみ可能となった<sup>(67)</sup>。オリビエが述べているように、これまで国境を自由に行き来しながら「国境のない世界」を生きていた人びと、中国東北部のコリアン(朝鮮族)にとって、そのような区別が設けられたことはとても大きな変化だったのである。その中で、彼らは「戦術的に」生活世界を構築する過程で「朝鮮人ではなく朝鮮族であると自覚」すること、「国家が奨励する新たなアイデンティティ」<sup>(68)</sup>の受け入れをめぐる諸状況にストレートに向き合って正面から衝突する代わりに、「自己認知や思考を時に曖昧化」<sup>(69)</sup>させてきたのである。そこにはリミナリティが常態化した日常を生きる人びとの姿が示される。

#### 4. 多元的生活実践「ポッタリチャンサ」とネットワーク

「ポッタリチャンサ」とは朝鮮語(韓国語)であり、ポッタリは小包、チャンサは商売を意味する。すなわち、「物をポッタリ(風呂敷)に包み、持ち歩いて売る人」<sup>(70)</sup>を指す。

中国と北朝鮮を行き来しながら担ぎ屋として商売を行う女性の小規模出稼ぎは、従来の先行研究では「チョソンチャンサ(朝鮮商売)」<sup>(71)</sup>、「風呂敷商売」<sup>(72)</sup>、「ポッタリ貿易」<sup>(73)</sup>、「民

(65) 竹沢泰子「ポスト多文化主義における人種とアイデンティティ：アジア系アメリカ人アーティストたちの新しい模索」竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店、2009年、266-290頁；竹沢泰子「序論：人種表象研究の今後の課題」『人文學報』第100号、2011年、1-11頁。

(66) 河上幸子『在米コリアンのサンフランシスコ日本街：境界領域の人類学』お茶の水書房、2014年、160頁。

(67) オリビエ「中国東北部コリアンの政治的手段としての民族性」278頁。

(68) 同上、278頁。

(69) 河上『在米コリアンのサンフランシスコ日本街』158頁。

(70) 高島淑郎「関釜フェリーの「ポッタリ[担ぎ屋]」について」『社会文化研究所紀要』41、1998年、175頁。

(71) キム・ファソンは、1970年代末から、中国産軽工業商品や加工食品を北朝鮮に持って行って商売をする「チョソンチャンサ(朝鮮商売)」が、朝鮮族の副業になっていたことを指摘している(김화선『조선족마을의 변천연구』연변대학출판사, 2011)。

(72) 鄭雅英は中朝国境地帯の朝鮮族個人商による「風呂敷商売」を、地域住民の需要に応える地道な経済活動として取り上げている(鄭雅英『中国朝鮮族の民族関係』アジア政経学会、2000年)。

(73) チョン・ウンイは、中朝両国の経済的要因に促された市場形成・発展の媒介として朝鮮族の「ポッタリ貿易」を取り上げている(Eun Iee Joung “Brethren Economic Networks’ Forming Processes and North Korea’s Gradual Opening-Up: Focusing on Korean Residents in China at Border Areas between North Korea and China and Related persons’ life with China,” *Journal of Northeast Asian Studies* 62, 2012, pp. 127-150)。

間貿易」<sup>(74)</sup>など、さまざまな名称で言及されている。中国と北朝鮮を行き来しながら担ぎ屋として商売を行う女性の小規模出稼ぎという現象は、その概念が統一されず、別々に扱われることで、その意義は十分に判明されなかった。本稿では、中国と北朝鮮を行き来しながら担ぎ屋として商売を行う女性の小規模出稼ぎを多元的生活実践「ポッターチャンサ」として概念化し、議論を進めたい。

#### 4.1 なぜ国境を越えたのか

中国東北部に移住した初期(19世紀中頃)のコリアンはその大多数が農民であり、丘陵地の耕作に長けていた朝鮮人農民は、隣接する朝鮮の咸鏡道よりも農業に適していた間島の方に移住し、湿地を水田として開墾していた<sup>(75)</sup>。間島は基本的に朝鮮人農民の移住によって形成された農業社会であった。

中華人民共和国成立後の中国では、農村部から都市部への人口流入の制御を目的として戸籍管理システムが実施されてきた。ソ連の住居登録制度に範を取った中国特有の「戸口」(戸籍)システム<sup>(76)</sup>は、1950年代初頭、都市居住者を対象として展開された。農村地域における戸籍登録や国籍問題などに関する管理が各地域部門へ移管されたのは1956年以降であり、1958年の『中華人民共和国戸籍登録条例』(外国人居住者・無国籍者を除いた中国公民を対象とするもの)の公表からはじめて戸籍登録事務の全国的な整備と統一が実現された<sup>(77)</sup>。食糧危機が最も重大な局面を迎えた1960年代初頭に、農村における食糧危機は都市以上に深刻であったが、戸籍管理政策上の原則として、農民の都市への流入は制御された<sup>(78)</sup>。このように、穀物提供を確保する必要に迫られていた国家が農民を農村・農業に固定しておく装置として「戸口」(戸籍)システムは導入された。「文化大革命」後の1970年代後半から80年代初頭にかけて、人口移動の局面は多様化してきたが、依然として移動を制御する根本的な方針は維持され、人々は業種と居住地を規定され、人びとの移動は大幅に制限されていた。本稿が主題としている「ポッターチャンサ」は、このような政策が施行された状況下で登場し、行われていた。

「改革開放」政策の実施・拡大に伴い、計画経済体制下での集団労働を特徴とした「人民

(74) 中朝貿易を経済学的観点から分析した林今淑と李光哲は、担ぎ屋として商売を行う小規模出稼ぎ「民間貿易」を80年代初頭に出現したインフォーマル・トレードの商業ブームとして取り上げた(林今淑, 李光哲, “中朝边境贸易的现状及其对边境地区社会经济的影响” 东北亚论坛5, 2004, pp. 19-23)。

(75) 鶴嶋『中国朝鮮族の研究』32頁。

(76) 川口幸大、堀江未央「序章 国内移動をいま論じる意味：中国と日本」川口幸大・堀江未央編『中国の国内移動：内なる他者との邂逅』京都大学学術出版会、2020年、6頁。

(77) 内田知行「戸籍管理・配給制度からみた中国社会」毛里和子編『毛沢東時代の中国』日本国際問題研究所、1990年、269頁。

(78) 同上。

公社」が漸次解体され、農民は割り当てられた耕地の生産・経営を任せられ、収穫量から政府へ供出する所定の農産物の量や税金などを除き、残りを自分で処分できるようになった<sup>(79)</sup>。そのうえ、1980年代に中国政府は農村の非公有制経済の発展を奨励したので、サービス業を中心とした都市地域での個人商売の活性化が促進された<sup>(80)</sup>。中国各地の人びとは豊かな生活を求めて都市へと移動し、「外国に出ることのできる条件を有する者は合法的・非合法的に国外に流出した」<sup>(81)</sup>。これは、農業生産請負制の実施によって、農業生産の合理化の進展・農民の就労時間の縮小が実現され、余剰労働力が農村から都市へ、国内から海外へと流出したことを意味する<sup>(82)</sup>。

このような労働人口の流動化は特に女性の間で顕著に進行した。それは、「人民公社」の解体によって農村の「公共領域」での女性の空間の喪失<sup>(83)</sup>が発生したことと関連している。社会の変化の規模がかつてないほど大きくなると、個人の世界は、個人の力ではどうにもならないような世界的な出来事によって形作られることが多くなる<sup>(84)</sup>。男性と同様に農業生産労働に参加し、重要な労働力としての役割を果たしていた女性は、急激な社会変動を背景とし、「社会とのつながりの希薄さと、予測不可能な大きな出来事の組み合わせ」<sup>(85)</sup>という状況に直面したのである。

また、朝鮮族女性の場合、そのような物質的な幸福・経済的成功を求める経済活動を中国国内ではなく、国境を越えて情緒的な結びつきを有する北朝鮮で行うことになったのである(図2)。彼らが国境を越える「ポッターリチャンサ」という実践を選択した背景には、「戸口」(戸籍)システムによって中国国内における移動が制限されている状況と、親族関係に基づいて付与される通行証制度<sup>(86)</sup>という国家の制度的装置があった。

敷衍すれば、①中国国内の経済体制の変化による「人民公社」の解体と公共領域での女性の空間喪失、②急激な社会環境の変化とともに個人の世界が不安に陥ることによって、経済活動の活性化が顕著になったのである。加えて、さまざまな管理や制限が絡み合う社会環境によって、朝鮮族女性は国境を越える「ポッターリチャンサ」という実践を選択した。それは、①「ポッターリチャンサ」の移動先である北朝鮮が中国東北部の朝鮮族集住地と地理的に近接していること、②中国国内において移動の制限が設けられていること、③親族関

(79) 朱永浩『中国東北経済の展開：東北アジアの新時代』日本評論社、2013年。

(80) 同上。

(81) 松田康博「中国の対外行動を制約する国内政治要因」『平成18年度安全保障国際シンポジウム報告書』、2007年、41頁。

(82) 韓景旭「中国朝鮮族にみる村の生活：吉林省星火村の調査報告」『国立民族学博物館研究報告』21巻3号、1997年、569-634頁。

(83) 김화선『조선족마을의 변천연구』연변대학출판사, 2011。

(84) Brendan D. Kelly “Globalisation and psychiatry,” *Advances in Psychiatric Treatment* 9, no.6 (2003), pp.464-470.

(85) Kelly “Globalisation and psychiatry,” p. 468.

(86) 国境地帯の住民を対象とする「中朝辺境地区住民通行証」

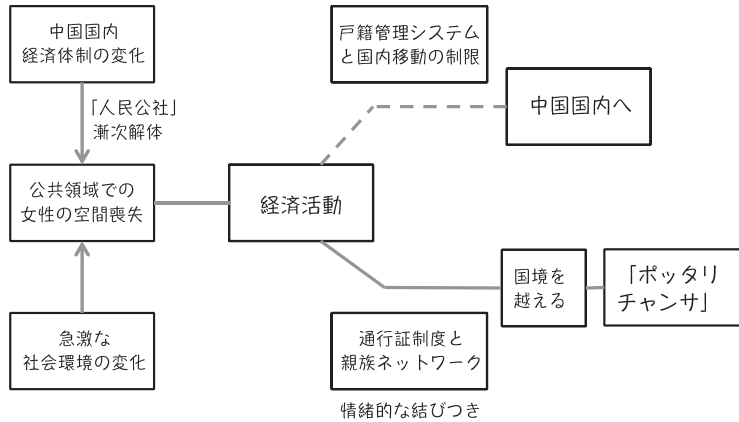


図2：社会変動と朝鮮族女性の経済活動(筆者作成)<sup>(87)</sup>

係に基づいて発給される通行証制度という国家の制度的仕組みが存在すること、④国境をまたいで存在する親族ネットワークがありことの諸要因が絡み合って表れた結果として考えられる。

#### 4.2 物質的・象徴的なものの移動

調査を通じた複数の事例から、必ずしも「商品」の範疇には当てはまらないものの移動が見られた。それは、従来の先行研究では看過され、これまで注目されてこなかった「イブルドゥン」という織物の移動である。表2に示されるとおり、「イブルドゥン」という織物は商品として、または贈り物として国境を越え流通していた。

表2：「ポッタリチャンサ」とものの移動(聞き取り資料により筆者作成)

インフォマント	生年	性別	訪問先(北朝鮮)	移動年度	同行者	移動方向			
						中国→北朝鮮		北朝鮮→中国	
						商品	贈り物など	商品	贈り物など
E氏	1947	女	鍾城郡：あいやけの家、小姑の家。会寧市：またいとこの家	1974年(鍾城郡)、1976年(会寧市)	不明	織物(イブルドゥン)、衣類、壁掛け布、	衣類、壁掛け布、織物(イブルドゥン)お米、油、加工食品	海産物	
H氏	1943	女	清津市、雄基郡(先鋒郡、現在の祖先)	1990年	夫	衣類		1990年代：海産物、栗	1962年夫の姉からの贈り物：織物(イブルドゥン) * 1965/66年に夫の姉は中国からイブルドゥン、布、婚礼衣装などを持っていった
M氏	1939	女	鍾城郡	1972年(20日間)、70年代末～80年代初回数回	なし	織物(イブルドゥン5～6枚、中国製)、衣類、サッカリン、	織物(イブルドゥン)	衣類、海産物、スプーン(40本)、靴	腕時計(1個、子どもへの贈り物)
N氏	1951	女	平壤、会寧市、羅津(羅先市南部の旧称)、漁郎郡	1974年、1986年、1994年、(7回以上)	不明	織物(イブルドゥン)、ミシン、テレビ	織物(イブルドゥン1970年代)、お米、軽工業品、サッカリン、味の素、小麦粉、薬品、衣類、テレビ、ミシン、自転車	不明	加工食品、腕時計
U氏	1940	女	会寧市、先鋒郡、両江道(伯母、伯父の家)、恵山、清津(伯父の家)	1984年～90年代まで(毎月)	親族	織物(イブルドゥン)、衣類、お酒(中国バイチュウ)、加工食品(月餅など)	お米、加工食品	1984年～90年代：海産物、衣類。80年代末～90年代初：テレビ	1961年：織物(イブルドゥン、本人用)、婚姻用衣料品。1985年：冷蔵庫(旧リ建製、自家用)

(87) 矢印は変化の向きを意味し、プロセスの流れを示している。実線は国境を越える移動への接続を示し、破線は中国国内への移動の制限による移動の断絶を示す。



「イブルドゥン」は、朝鮮族社会において婚家に嫁ぐ時に花嫁が持参する寝具類の製作に必要な材料としての織物のことである。このような入嫁の際に花嫁が持参する持参財<sup>(88)</sup>は中国を含むユーラシア大陸の特徴として指摘されてきた<sup>(89)</sup>。先行研究では朝鮮族の伝統婚姻儀礼のなかで花嫁が持参する持参財「寝具」の存在が取り上げられている<sup>(90)</sup>。持参財「寝具」は、移住初期から20世紀末において朝鮮族の伝統婚姻儀礼のなかで生き続けていた<sup>(91)</sup>。また、このような持参財はソウル地域における婚姻儀礼においても同様に存在していた<sup>(92)</sup>。

それでは、「イブルドゥン」はなぜ国境を越え流通していたのか？「イブルドゥン」の移動はどのような意味を持つのか？以下では、個別具体的な事例を通してその実態を明らかにする。

【事例】U氏(1940年生、女性)

「当時(1961年)の中国では物を自由に購入できなかった。どこかの『合作社』が訪問した時にアレンジされて買うことになるから。だから、『合作社』が来れば(村を訪問したら)イブルドゥンを買えるんだけど、来なければ買えないのよ。それで、朝鮮から入ってくるものを買う人が多かった。だから私も(朝鮮に)行ったついでに、チョンナル・オッグム<sup>(93)</sup>とイブルドゥンを中国に持ってきた。だけどその時にうちは貧しかったし、(私が)いつ結婚できるかわからなかったからね。それで、市場に行ってそれ(イブルドゥン)を売ったんだ」。

U氏の語りは中国で実施されていた配給制度を背景とする当時の生活実態を表している。1949年の中華人民共和国成立後、中国は「低消費」の全体政策を実行し、それによって具体的な主要消費財の配給制を主とする消費政策を制定した<sup>(94)</sup>。消費財の配給制度は、物質不足という経済的現実と「『正統』社会主義イデオロギーの存続」という二つの要因を背景として展開された<sup>(95)</sup>。配給券(証)には専用票(紙幣のような印刷物：糧票・麵票・油票・

(88) 丸山孝一は持参財について次のように説明している。「結婚にあつて花嫁が自分の生家から与えられ、婚家へ持ち込む財貨のことで、現金、不動産、家畜、家財道具などさまざまな形態をとる。当然のことながら、構造的に母系制や母方居住婚とは整合性が薄く、嫁入り婚の形式をとる場合に多い。持参金は花嫁の父から婿に直接贈られる場合もあるが、嫁自身が娘として生家で一旦相続したものを結婚して持って行くという場合もある」(丸山孝一「持参金」石川栄吉ほか編『文化人類学辞典』弘文堂、1987年、325頁)。

(89) 中生勝美「婚姻贈与と婚姻連帯：漢族の婚姻体系と地域性」『国立民族学博物館研究報告別冊』第14巻、1991年、161-197頁。

(90) 천수산 “중국 조선족 풍속” 민족출판사, 2008.

(91) 同上。

(92) Na-Young Hong and Hye-Kyung Choi, “Transition of Marriage Customs in Seoul, Korea from the End of Japanese Colonial to the Present,” *The Journal of Seoul Studies* 17, 2001, pp. 179-228.

(93) チョンナル・オッグム：結婚日に着る服に使う生地

(94) 徐涛「中国の消費と流通経済」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第44号、2012年、151-158頁。

(95) 内田「戸籍管理・配給制度からみた中国社会」258-290頁。

肉票・布票・ゴム靴票など)と購入証(通帳形式の証明書：購糧証・副食証・購貨証・軍人購貨証など)の2種類があり、配給券による商品の配給は1953年の食糧配給から開始された<sup>(96)</sup>。1960年代に入って、市場の商品供給不足、自然災害などによる農産物や軽工業品の不足という状況で、配給制度は一層厳格に実施された<sup>(97)</sup>。

U氏が経験した「当時の中国では物を自由に購入できなかった」という状況はこのような社会環境を背景としている。消費財の逼迫により必要なものが手に入らない状況で、U氏は国境を越え北朝鮮に渡って行って「イブルドゥン」を持ってきた。これは、彼らにとっての婚姻儀礼における持参材の重要性を示している。

【事例】G氏(1940年生、男性)とH氏(1943年生、女性)

「60年代(1962年)に(朝鮮から中国へ)戻るときにイブルドゥンを持ってきた。朝鮮に『本物(絹織物)』があった。……朝鮮のイブルドゥンを持って来て結婚した。朝鮮のイブルドゥンが良いから。イブルドゥンは、(朝鮮の)姉からプレゼントでもらって(中国に)持ってきた」。

G氏は幼い頃から頻繁に豆満江を泳いで朝鮮半島北部に「遊び」に行ったり、朝鮮半島北部の親族を訪問したりした。1962年、G氏は妻のH氏と一緒に北朝鮮のG氏の姉(2番目の姉)の家を訪問した。当時、G氏とH氏は結婚するときの必需品としてG氏の姉から「イブルドゥン」をプレゼントしてもらった。G氏は、なぜ朝鮮から「イブルドゥン」を持ってきたかという問いに対して次のように語った。「そこ(朝鮮)のものが良いから。朝鮮に『本物(絹織物)』があった」。

また、H氏は「当時は(G氏の姉に)世話になった。夫の姉からものをもらったり、(北朝鮮で)ものを買う時に、その姉の助けを借りて安く購入できたりした」と述べた。H氏は、当時北朝鮮で購入したモノを中国で売り、経済的利益を得たという。ここでは、彼らが国境を越え親族に依存する生活実態が示される。

G氏・H氏の事例から、持参材は共通した伝統的な婚姻風習として朝鮮族と北朝鮮の人びとの伝統婚姻儀礼のなかで生き続けていたことを見出すことができる<sup>(98)</sup>。また、1980年代以降になると「イブルドゥン」は中国から北朝鮮に流れていく傾向が見られるようになる。それは、延吉市の朝鮮族絹織物工場の登場によって、中国東北部では「イブルドゥン」を容易に調達できるようになったことと関連がある。「ポッタリチャンサ」の移動による持参財「イブルドゥン」の流通は、中国東北部と朝鮮半島北部におけるコリアンのトランスナショナルな文化的連続性を保持する役割を担っていたと考えられる。

(96) 同上、274頁。

(97) 同上、274頁。

(98) 姜秀玉は、1980代まで朝鮮族の伝統衣装である韓服は北朝鮮からの絹織物で作られていたことを指摘している(Xiuyu Jiang “On the Second Generation Female Korean-Chinese Immigrants’ Living Situation and Identity,” *Women and History* 27, 2017, pp. 93–118)。

## 【事例】U氏(1940年生、女性)

「80年代になって、『解放』（改革開放後）してから偽物が多く出てくる。人びとの生活の質が上がるから、なんでも買えるようになって、偽物を作り始めるのさ。1980年代に私が朝鮮に行ったとき、その時は人絹生地（レーヨン）だった。テカテカした生地で、人絹生地だった。その時は、『本物（絹織物）』も販売したけど、朝鮮には本物は少なく、人絹が多かった。

布団は、昔から必ず女性が持参するものだった。裕福な家だと2セットを用意するが、私たちだとせいぜい1セット（敷布団と掛け布団一つずつ）用意できた、生活に余裕がないからね。裕福な家は、絹の布団は必ず準備するもので、そのほかにも、木綿の布団も1セット用意してあげる。その時は、大きな赤い花柄のものを。それは普段使うものとして、ビダンイブル（絹織物）の布団の方は、部屋の中に飾っておいて、客や子どもたちが訪問したら、木綿の布団を使わせて、絹織物の布団は私たちが掛けたり、そうする。絹織物の布団は必ず緑か青で、赤色の布団にはしなかった。

家で木綿を買うと、購入した木綿は、最初は黄色いからね。それを釜で、灰汁でゆでて、外に縄を張ってゆでた布を干すと、黄色い木綿が白くなる。一回洗うだけで白くなるわけではなく、洗って干して乾いたらまた濡らして干して…、その作業を数日繰り返したら、布が漂白されて綺麗になる。その後はのり付けをして叩く（木槌で砧打ちをする）。叩いてツルツルにすると汚れが付きにくくなるから。そうした布で掛け布団や敷布団を作る。すべて女性たちが作る。村のみんなが一緒に作ってくれた。その時は人情に厚く、みんな集まって布団も一緒に作ってくれて、布も一緒に叩いたりした」

持参財としての「イブルドゥン」は、中国東北部の朝鮮族社会において、古くから花嫁側の母や親戚、村のお年寄りなどの、女性によって仕立てられた。しかし、1980年代に布団工場が登場してからは、手作りせず、既製品を購入する人が増加した。

なぜ「イブルドゥン」を用意しなければならないのかという問いに、U氏は「私たちチョンサラム（朝鮮人）の伝統だからね。昔からの風俗なんだよ」、「布団は必ず絹織物でなければならなかった。その時はね。布団（の色）は、必ず青（緑・青）にする。赤い布団はしないのよ。赤い色の花柄の（絹ではない）何かしらの織物のものを使っていた漢族とは違ってね。敷き布団は七色緞<sup>(99)</sup>が多かった」と説明した。

G氏の「朝鮮に本物があった」語りやU氏の「本物も販売したけど、本物は少なく……」という語りから示される「本物」、「偽物」の定義を見ると、伝統的な素材（絹織物）のものが「本物」であり、そうでないもの（レーヨンなどの類似の布地や刺繍模様を模したもの）は「偽物」である。ここでは、歴史的な伝統文化としての「イブルドゥン」は民族の象徴として表象されていること、また、そこに付与された文化的価値が重要視されていることが示される。伝統的な素材の織物を入手できない状況においては、織物そのものに付与された意味とその機能が重要だとみなされるのである。それは、「偽物」に変わっても婚姻儀礼において機能するため、依然として象徴するものとなるからである。また、U氏の語り「…漢族

(99)七色緞：カラフルな色の絹織物を指す。

とは違ってね」では、U氏が他集団(漢族)との比較を通して、その差異化を図る状況が示される。

#### 4.3 生活戦略とネットワーク

「ポッタリチャンサ」が中国から国境を越え北朝鮮に渡って行くためには、「通行証」あるいは、パスポート(ビザ)が必要となる。「通行証」制度は、1980年代初頭、中国の改革開放政策とともに中朝両国間の協定が結ばれ、両国間で親戚訪問が許可されたことによるものである<sup>(100)</sup>。「通行証」は、血縁関係にある親族からの招待状を添えることにより申請できる。このような招待状には抜け道があり、厳密には血縁関係にある親族の招待状でなければならないが、その「血縁関係」の境界線は非常に曖昧なものだった。したがって、実際に親族と称呼するような往交のない一般家庭に滞在することを隠れ蓑に商売を行うこともあった。以下のU氏の事例には、その状況がよく示されている。

##### 【事例】U氏(1940年生、女性)

「1959年に小学校の同級生、私の友達が朝鮮へ移住したのよ。その子(家族)は、それ以前の、戦争の時に、『難民』で(朝鮮北部から中国東北部に)入ってきたのよ。それから、私の近所に住みながら、私と一緒に学校に通った。その子は(1959年に北朝鮮に移住してから)中国に来たことがあってね、それで、その子の(北朝鮮の)住所がわかったから、恵山に『ポッタリチャンサ』に行くときは、その子の家に何回も泊まったのよ。私たちは、親戚が(北朝鮮に)いなければ証明書を申請できないからね。それで彼女(北朝鮮へ移住した小学校の同級生)を『妹』として(証明書を申請した)……。その子は私と姓が同じだったからね。

1959年ごろまでは私たちのところ<sup>(101)</sup>で生活していて、同じ村で生活していたが、「復旧建設」に行くとして、志願して(北朝鮮に)行った人たちが多かった。そうして行った人びとは面識があるから、そのような家を、親戚の家としたり、その中で同じ姓の人がいると、その人は何親等の人だとしたり、そのようにして証明書を申請したのよ」。

同じ村で生活したことのある人びとがいる地域や住所はどのように知ることができた

(100)「中朝辺境地区居民通行証」(中朝辺境地区居民过境通行证)は、中朝辺境地域通行に関する条約による制度である。中国と北朝鮮の国境地帯の住民は、親戚訪問や辺境貿易などを目的として、最大1ヶ月間、辺境地域に滞在できる。その申請書には、行き先の辺境の地域名や親族の名前、間柄などを記入する欄がある(Sung-Cheol Lee, Yong-Hee Lee and Boo-Heon Kim, "Entry Types and Locational Determinants of North Korean Workers in Cross-border Regions between North Korea and China," *Journal of the Economic Geographical Society of Korea* 22, no.4 (2019), pp. 438-457)。「通行証」を用いて頻繁に国境を渡ったU氏は次のように語っている。「通行証は、必ず親族関係を証明できる書類を用いて申請する。昔は、故郷の場所と、親族関係などが登記されている証明書があった。それを証明として、交番から通行証を発行してもらった。通行証を用いる場合は1ヶ月間滞在できる。会寧までは通行証で行けたけど、それ以上の地域へ移動するにはパスポートが必要だった」。

(101) 中国東北部の朝鮮族集住地域を指し、ここでは、U氏が住んできた村のことを指している。

か、それは国境を「自由に」行き来できたからなのかという問いに対して、U氏は「その時は、意のままに行き来できる時期ではなかった」<sup>(102)</sup>と答え、次のように説明を加えた。

「それは、同じ村で生活していたが、(朝鮮に)移住した人たちの親戚がまだ私たちの村に残っていたからね。親戚まで全部移住したわけではないから、移住した人たちもまた申請をして(中国の親戚の家に)来ることもあったからね。その人たちが来た時に『今度、訪問します』と言っておくと、(北朝鮮の家の)住所を書いてくれるのよ。そのようにして住所がわかって、(申請を出して)渡って行ったりした。もちろん、その中で『同じ姓』の家でなければならないが、姓が違う家でも、外家(母方の実家)の村(北朝鮮)だとして、母方の親戚になると伝えたりして申請できる場合もあった。それも、母方と同姓でなければならないが」。

「そこ(北朝鮮)の人たちは私たちが彼らの家に滞在することを喜ぶからね。なぜなら、彼らにとにかくプレゼントはあげなければならないし、食べ物も持っていくと分けてあげたりするからね。だから、彼らも知り合いを通して私たちと『親族関係』を結ぼうとするのよ」。

U氏の語りから示されるように、「ポツタリチャンサ」の担い手としての朝鮮族女性は、国家の制度的仕組みを逆手にとって利用しながら、親族関係や伝手をたどり、戦略的なネットワークを構築してきたのである。また、U氏の「その時は、意のままに行き来できる時期ではなかった」という語りから、彼らの国境に対する認識が表れる。

カースルズとミラーが指摘しているように、家族のつながりは移民を支える金銭、文化、社会資本を提供し、移民の連鎖を引き起こす外的要因(雇用や募集など)によって始まることが多い。移動の連鎖が確立すると、人びとはすでに移動先にいる親戚や友人から支援を受けながら、安心して移住を続ける。特にアジア系移民に関する研究では「移民の決断は年長者(とくに男性)によって行われ、若者や女性たちは家父長制度上の権威にしたがうよう期待される」<sup>(103)</sup>ことが示され、個人ではなく、家族によってその移動・移住の決断がなされる場合が多いことが指摘されてきた。若い男性の労働力がより農業経営に必要であり、若い女性は送金などに関してより信頼できる存在としてみなされていることから、家族は若い女性を海外などに送出することが多い<sup>(104)</sup>と考えられている。

朝鮮王朝中期に両班階級を中心に形成されたコリアンの伝統的な家族は、儒教思想の影響を強く受け、父系血統重視の家父長制に基づく性的役割分担を有する家族を特徴としてきた<sup>(105)</sup>。このような家族の特徴は朝鮮族の家庭内においても表れている。カン・スオクの調査によると、朝鮮族2世の女性たちは「若い頃に出勤しながら家庭の世話や、子育てなどをすべて一人でしなければならなかったのでとても大変だった」<sup>(106)</sup>という状況を明ら

(102) U氏は1984年から1995年まで毎月国境を越えた。

(103) カースルズほか『国際移民の時代』36頁。

(104) 同上。

(105) 小林孝行「韓国家族の変容と家族政策」『文化共生学研究』第4号、2006年、69-88頁。

(106) Xiuyu Jiang “On the Second Generation Female Korean-Chinese Immigrants’ Living Situation and Identity,” p. 105.

にし、朝鮮族2世の女性の家庭内における役割にはコリアンの伝統的な家族の特徴が依然として存在していることを窺わせる。

【事例】V氏(1953年生、女性)

「私が北韓<sup>(107)</sup>に(商売に)行った時は、(家事や)育児をすべて夫がした。夫が当時とても苦勞した。私が北韓に商売に行く前には、家の外で豚も飼っていて、そのような家畜の管理や、子どもたちの世話などを全て夫がした」。

一方、「ポツタリチャンサ」家庭の性別役割分担を見ると、V氏の事例から示されるように、「男はソトで、女はウチ」という図式とは反した様子が窺われる。このように、少なくとも「ポツタリチャンサ」を行う朝鮮族の家庭では、「男はソトで、女はウチ」という性別役割分担の意識は強くなく<sup>(108)</sup>、女性が商業に従事するなど、外で働くことで家計を支える状況に対して必ずしも否定的ではないことが示される。

図3は、E氏・M氏・T氏・U氏が「ポツタリチャンサ」の担い手として国境を越える際に用いた親族ネットワークを図式化したものである。E氏は夫の親族ネットワークを用いて移動し、T氏の主な訪問先は北朝鮮の姉の家であり、U氏は主に母方のネットワークを用いた。またM氏の場合は特殊な状況だが、幼い頃(7歳)に母を亡くしたことによって、母側の親族とのコンタクトは断絶状態であり、父系親族のネットワークを用いて移動した。

ここでは、「ポツタリチャンサ」を行う朝鮮族女性が、状況に応じて「親族関係」を活用している様子が窺われる。

## 5. 結論

本稿では、中国朝鮮族の人びと(主に2世3世)の中朝間の国境を越えた移動経験の実態を、①朝鮮戦争休戦後から「チョソンパラム」(北朝鮮ブーム)の展開前まで、②「チョソンパラム」の展開(1957年後半～1964年)、そして③中国の改革開放とともに生じた「親族関係」を活用した多元的生活実践「ポツタリチャンサ」の三つの動向に着目し、当事者へのインタビュー(当事者の語り)に基づいて明らかにしてきた。

そこでは、まず、朝鮮半島北部から中国東北部に渡る地域には、コリアンによって歴史

(107) 北朝鮮：「北韓」は韓国における呼称である。本稿に登場する聞き取り協力者においても、個人によってその呼称はさまざまである。特に朝鮮半島の京畿道以南の地域から移住した人びとや、移住後も出稼ぎや親戚訪問などを通じて継続的に韓国の人びとと接触を維持してきた人びとは「北朝鮮」や「朝鮮」ではなく「北韓」という呼称を使用して語る傾向がみられる。

(108) 園田「第一部 第3章 移動社会としての太陽鎮」81頁。園田茂人はこのような朝鮮族の性別役割分担の変容を、社会主義国家の中国に存在する規範や「改革開放」政策による経済機会の増加、また「多くの家族が困窮しており名望家が存在していなかったという歴史的環境」などの影響があると主張し、その変容の原因と影響力を明らかにすることは容易ではないと述べている。

(109) ○=女性、△=男性。斜線は物故者を意味する。

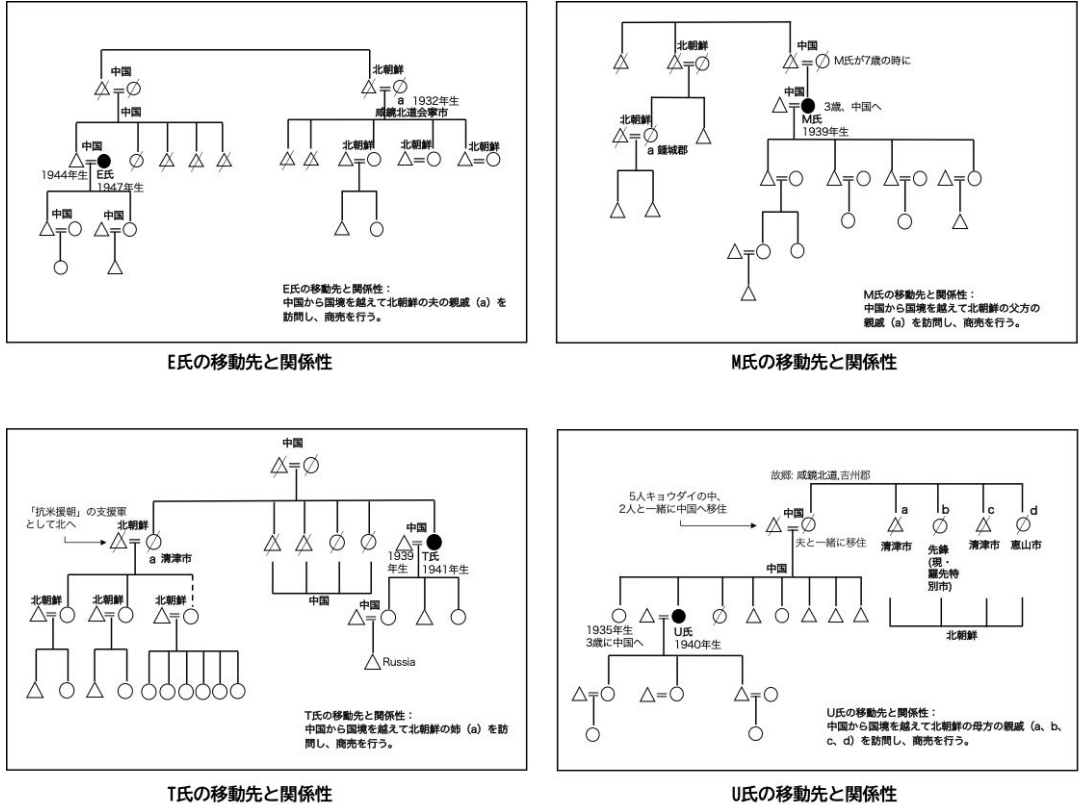


図3：E氏・M氏・T氏・U氏の移動先と関係性(聞き取り資料により筆者作成)<sup>(109)</sup>

的に形成された生活空間が存在していたことを確認した。そのうえで、これらの地域を移動・移住した人びとの個別具体的な経験への着目、それら人びとの境界を越えた移動・移住の事情やその動態に注目しようとする視角から、朝鮮族の人びとの生活世界の構築とその社会的相互作用の過程を検討した。その議論をふまえ、当該地域にはトランスナショナルな社会空間が存在し、それは歴史的連続性の中で維持されてきたことを指摘した。

本稿では、個別具体的事例を通して国民国家を相対化しながら国境をまたぐ人びとの姿を描き出した。豆満江以北一帯の日常的な交流の継続、必ずしも永住につながるわけではなく、頻繁に国境を行き来しながら営まれる生活実態、解放以前から存在していた一体化した生活圏を保持する側面<sup>(110)</sup>は、「国境のない世界」を生きるような人びとの生活世界を可視化する。

しかし、国境をまたいで移動する人びとが「脱領土化された自由な人びと」というイメージはあらためて検討しなければならない<sup>(111)</sup>。本稿において取り上げた豆満江沿岸一帯の

(110) 鄭雅英『中国朝鮮族の民族関係』304頁。

(111) Michael Peter Smith, Luis Eduardo Guarnizo, *Transnationalism from Below Comparative Urban and Community Research* (New York: Routledge, 1998).

人びとの国境を越える移動には、社会的上昇や経済的成功を得るための戦略として行われる移動や経済格差に着眼したインフォーマルな経済活動を行って経済的利益を得ることを目的とする実態も表れている。このような国境をまたぐ移動は、国民国家の枠組みの強い存在感を浮き彫りにしている。トランスナショナルな実践は、文脈が課す制約や機会の中に組み込まれ、特定の社会・経済・政治的な関係の中で構築されており、認識された共通の利益や意味によって結び付けられている<sup>(112)</sup>。

国家政策と経済の進展のなかで、さまざまな管理や制限が絡み合う社会環境を背景に、朝鮮族の人びとは国境を越えて移動しながら生活空間を形成してきた。そこには、国家の制度的仕組みを逆手にとって利用し、戦略的なネットワークを活用して自らの生活世界を構築していく実践のありようが示される。

### おわりに

1990年代以降に活発な研究が行われるようになったコリアン・スタディーズの特徴は、韓国社会の内部のみではなく、在外のコリアン、すなわちコリアン・ディアスポラに焦点が当てられていることである。ポストコロニアルな状況、冷戦と祖国の分断、またグローバリゼーションという状況のもとで、東アジア社会の各地に離散し、取り残されたコリアンの移動とアイデンティティの形成・変容の過程に着目した研究が行われてきた。

中国の「改革開放」政策以降、サービス業を中心とした都市地域での個人商売の活性化が促進され<sup>(113)</sup>、中国各地の人びとはより豊かな生活を求めて都市へと移動した。しかし、中国東北部の人びと、特に朝鮮族女性は、北朝鮮へ、さらにはロシアへと移動することで、移動性の担い手としての役割を果たしてきた。ここで、フィールドを拡張し、たとえば、1990年代からロシアに進出した朝鮮族の「ポッターチャンサ」の実践と彼らの商業ネットワークの諸相を視野に入れると、「多元的生活実践や多元的帰属意識の形成」には、どのような共通点と相違点、独自の特性が示されるのだろうか。このような問いは、本稿の議論をふまえた今後の研究課題になりうる。

---

(112) Luis Eduardo Guarnizo, "The Economics of Transnational Living 1," *International migration review* 37, no. 3 (2003), pp. 666–699.

(113) 朱永浩『中国東北経済の展開代』2013年。